

親鸞仏教センター主任研究員定例講座

『歎異抄』思想の解明 第Ⅱ期・第1回(通算第8回)

第一章——先師口伝の大道(1)

加来 雄之

『歎異抄』思想の解明(第Ⅱ期)趣旨文

親鸞仏教センターの主任研究員定例講座として『歎異抄』を講読します。私たちが、今、すでに出遇っている宗教言説(「よきひとのおおせ」)を相続していくこととはどのような営みであるのかという視点から、『歎異抄』の思想がもつ現代的意義を聴講の皆さんと共に解き明かしていきたいと思えます。

浄土真宗にとっての20世紀は『歎異抄』の世紀というべきものでした。20世紀初頭に、それまで宗派内のテキストに過ぎなかった『歎異抄』が、清沢満之によって信仰の書として再発見され、約120年が過ぎ、今日では日本民族の宗教思想を代表する書として知られるようになりました。親鸞の人と思想とを、宗派の枠を越えて一般の人に開放する端緒となったのは『歎異抄』でした、日本という枠を越えて海外に伝播する先駆けの役割を果たしたのも『歎異抄』でした。

第Ⅰ期では、『歎異抄』というテキストに対するさまざまな誤解から『歎異抄』を解放し、現代における『歎異抄』思想の可能性を新たに切り拓くという課題をもって「漢文序」をていねいに講読しました。『歎異抄』とは、親鸞聖人の宗教言説(「よきひとのおおせ」)の本意を見失っていることを歎き、その本質と力を回復する使命を、親鸞聖人自身の仰せ(物語)に学ぶことで果たし遂げようとするテキストでした。

この度の第Ⅱ期では、『歎異抄』の本文の第一章から第三章を拝読します。このはじめの三章は先人によって、親鸞聖人の安心(あんじん)を表わす訓(おし)えとして位置づけられています。

とくに第一章は、親鸞聖人が法然上人の宗教言説(「よきひとのおおせ」)をどのように受容したかを、これ以上ないほど簡明に示しています。『歎異抄』の思想を読み解くための根本となる章です。

第二章は、親鸞聖人自身が法然上人の宗教言説(「よきひとのおおせ」)を相続していくときの立場を、「たとえ法然上人にだまされて念仏して地獄に落ちたとしてもまったく後悔するはずがない」などと感銘深く伝えています。

第三章は、「善人なおもて往生をとぐいはんや悪人おや」という法然上人の宗教言説(「よきひとのおおせ」)に対する親鸞聖人の独創的な受けとめが示される章です。いわゆる悪人正機説が出る有名な章です。

この三章は、法然上人の仰せを受けとめる親鸞聖人の根本となる立脚地を示しており、『歎異抄』思想を解き明していくための原点となります。

### 【第Ⅱ期の講読の方針】

- ・該当章の本文を拝読する
- ・本文の校訂を示す
- ・該当章の構成・構造（案）を示す
- ・本文の安良岡訳とその問題点をあげます。
- ・『歎異抄』の本文に即して解釈していきます。
- ・各章を読み終わったときに、①その章の加来訳を示し、②その章から学んだことを示し、③さらに、その章を通した『歎異抄』思想の解明することを試みます。

=====

### 【振り返り】

前回まで『歎異抄』について、題号とその名の由来を示す「漢文序」について学んできた。『歎異抄』とは、単なる親鸞の言行録でも教義の解説書でもなく、「歎異」というただひとつの課題を成し遂げるために「抄」という述作の方法、すぐれた言葉をぬきだしあつめた著述である。

「『歎異抄』一通」（蓮如本）は、本文の前半（垂師訓篇）においては、先師の言葉そのものを手がかりとしながら、先師口伝の真信についての訓えをあげ、次いで後半（誠異義篇）において、どのように先師口伝の真信に異なるか、つまりその疎外する原因を言い当て、「自見の覚語をもって他力の宗旨を乱」してはならないと批判し、そして最後にいわゆる後述において異義は「信心に異なるより」おこるのであるから、その信心とはなにかを語る物語をあげ、どのようにして先師口伝の真信を回復してゆくかについての二つのオホセを示すという展開をもつ著作であると私は考えている。

「歎異先師口伝之真信」という、師の教えによって真の信を獲ることが異なっている事実を歎く、事実を歎くということによって思うべき課題を私たち意識の上にも上らせることができる、そのことを通して、私たちの真信を回復しようとするのである。

とくに『歎異抄』の前十章の垂師訓篇は、親鸞が親鸞のよき人法然上人の教えをどのように受け止め、後学に伝えようとしたのかについての物語なのである。

了祥は「先師口伝の真信に異なることを歎く」のであるから、信が『歎異抄』の主題であり、その信とは二種深信であり、「如来よりたまわりたる信心」であるという。

（聞記、一五頁）法住も「一部の大意は先師口伝の真信を明かすにあり。」（聞記、三五二頁）という。慧眼であると思う。ただ真信を明かすだけであれば、「真信抄」といえばよい。やはり「歎異抄」というのは、真信に異なることを克服してゆく指標を与えることを主題とするというべきだろう（歎異の精神）。

## 【十章の構想】

今回より、本文十八章の講読に入る。

第一～第十章 垂師訓篇

第十一～第十八章 誠異義篇

とくに前半、十章（垂師訓篇）を解説していく。この十章は『歎異抄』の序によって示された「先師口伝の真信に異なることを歎く」という状況を超えて「有縁の知識に依って易行の一門に入る」ことのために集められ、構成された耳の底に留める物語である。

師訓と呼ばれる「云々」、「おほせそうらひき」で閉じられる十章の構造について、私は、基本的に了祥の『聞記』に依りたいと思う。

┌第一章～第三章 安心訓

十章└

└第四章～第十章 起行訓

安心訓、起行訓という名称の由来

『往生礼讃』「今、人を勧めて往生せしめむと欲せば（者）、未だ知らず、いかんが（若為）安心・起行・作業して定めて彼の国土に往生することを得る也。」

安心……『観経』に説きたまふが如き三心を具して必ず往生を得。……若し一心も少ぬれば、即ち生ずることを得ず（不）。」

起行……「又天親の『浄土論』に云ふが如し。若し彼の国に生ぜむと願ずること有る者にいは、勧めて五念門を修せしむ。若し具すれば定めて往生を得。」

作業……「また勧めて四修の法を行ぜしめて用て三心・五念の行を策まして、速に往生を得しむ。」

（往生礼讃前序）

## II 本文（蓮如本）

一 弥陀ノ誓願不思議ニ タスケラレ マヒ

ラセテ 往生ヲハ トクルナリト信シテ

念仏マフサント オモヒ タツ コ、ロノオコル

トキ スナハチ摂取不捨ノ利益ニ

アツケシメタマフナリ 弥陀ノ本願ニハ

老少善悪ノヒトヲ エラハレス タ、信

心ヲ **要**トスト シルヘシ ソノユヘハ罪悪

深重煩惱**熾盛**至常ノ衆生ヲタスケンカ

タメノ願ニ マシマス シカレハ本願ヲ信  
 センニハ 他ノ善モ 要ニアラス念仏ニ  
 マサルヘキ善ナキユヘニ悪ヲモオソル  
 ヘカラス 弥陀ノ本願ヲ サマタクル  
 ホトノ悪ナキユヘニト云々

【訳にかかわる校訂】

- \*1 「熾盛」、蓮如本では「至常」の左傍に点を付し、右傍に「熾盛」と記す。
- \*2 「に」——永正本「にて」
- \*3 「要」「えう」の右訓——永正本
- \*4 「なき」——永正本「なきが」

III 先人訳

〔 〕は本文にはないが安良岡が補ったと思われる箇所。下線は、訳として検討したい箇所。

蓮如本	(安良岡康作『全講読』、ただし〔 〕記号と傍線は加来が補った。)
<p>一 弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏まふさんとおもひたつころのおこるとき、すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。</p> <p>弥陀の本願には、老少善悪のひとをえらはれず、たゞ信心を要〈えう〉とすとしるべし。</p> <p>そのゆへは、罪悪深重・煩惱熾盛〈至常〉の衆生をたすけんかための願にまします。</p> <p>しかれば、本願を信ぜんには、他の善も 要にあらざ、念仏にまさるべき善な</p>	<p>一 阿弥陀仏の〔お立てになつた〕誓願の、人間の思量を超えた、絶対的な力にお助けをこうむって、「浄土に往つて生れることを果たすのだ」と信じて、〔口に「南無阿弥陀仏」という〕念仏を申し上げようという<u>思いが生ずる時</u>、即座に、一切の衆生を受け入れて救い取り、お捨てにならないというご利益に人間をお参加させになるのである。</p> <p>この阿弥陀仏の根本の誓願におかされては、老人と若い者、善い人と悪い人とをおえらびにならない。〔ひとにとっては、〕ただ一つ、〔その本願への〕<u>信心だけが必要なのだ</u>とよく心得なくてはならない。</p> <p>そのわけは、犯す罪悪が深くして重く、煩惱の勢いが非常に盛んな、一切の生き物をお助けになろうとするための願であらせられるからである。</p> <p>従つて、<u>弥陀の本願を信じようとするに当つては</u>、ほかの善い行いも必要ではないのだ。念仏より優越する善い行いはないのであるから。</p>

<p>きゆへに。悪をもおそるべからず、 弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆへにと云々。</p>	<p>また、悪い行いをも恐れてはならないのだ。〔阿弥陀仏の〕本願を妨害するほどの悪い行いはないのであるから。……</p>
--	--

### III 第一章の主題と構成

第一章は、唯円が耳の底に留めた、故聖人（親鸞）がヨキヒト（法然）によって口伝された（真信についての）仏道を説示する物語である。この第一章は、親鸞聖人が法然上人の仏道をどのように受容したかを、これ以上ないほど簡明に説示<sup>1</sup>しています。その意味で、この第一章は『歎異抄』の思想を読み解くための根本となる章です。

#### (1) 第一章の主題「先師口伝の仏道」

先人の見解……「弘願信心章」（『聞記』五頁）、「信心簡要」（總科の二。『聞記』）、「唯信宗要」（別科『聞記』八頁）。「誓願」（藤『講讃』）、「念持の大道」（曾我量深）など。

「一」

一つ書きを示す「一」の右上に小さく「一」と漢数字が振ってある。以後、第十八章まで順序数が振られている。このことは、蓮如本『歎異抄』では、本文に次第があること、とくに、この第一章が最初に押さえられなくてはならないと考えていたのであろう。

『歎異抄』全体を通底する仏道（親鸞が法然によって出会った仏道）についての物語がまず示される。「先師」「ヨキヒト」とは、親鸞にとっての法然、法然にとっての善導である。この伝統に立った仏道理解が、親鸞の身を通した受け止めがなされている。親鸞はおそらく法然に学んだ仏道の核心をこのように弟子達に語っていたのであろう。そこには善導そして法然の用語をもちいながら、かつ独創的で厳密な表現をもった親鸞独自の説示となっている。この第一章が『歎異抄』を貫く仏道を示しており、「先師口伝の真信に異なることを歎く」に当たっての根本教証である。

「第一章には、本書のこの章の後に出てくる問題のすべてを説明し、それらに対処するために必要な用語や概念が出てきます。」（A・ブルーム、三一頁）

『歎異抄』で語られる「先師口伝の真信」は、善導の口伝である二種深信と、法然の口伝である「如来よりたまわりたる信心」であり、それを通した親鸞聖人の真信に

<sup>1</sup> 安良岡は『歎異抄』の表現的特質を「口述性」→「説得性」→「説示性」と展開され、それが追体験ではなく「理」「道理」を説示するところにあるとする。

ついでに受けとめである。浄土真宗の教学としては七祖が必要であるが、ヨキヒトの伝承を語るときにはかならずしも七祖は必要がない。「ヨキヒト」とは、自らを仏道に導き、歩ませる存在である。例えば、第二章の法然の言葉は師の教えであるよりも「よきひとのおほせ」として押さえられている。

石田瑞麿は第一章における教義の説き方が親鸞のそれと大きく隔たっていることを理由に「この章には、第一、親鸞の言葉としては、はたしてこう言うだろうか、と疑わせるような表現がかなり見当たる。」(『その批判的考察』二〇頁)という。しかしその批判は以前にもふれたように『歎異抄』を教義解説書とみなすところから起る誤解に立った批判といえよう。

ではなぜ『歎異抄』の著者は『歎異抄』の冒頭に置く文章としてこの文を選んだのだろうか。第一章は、『歎異抄』の著者が『歎異抄』という名の著述をなそうとするときに、選び取った仏道についての確かめについての親鸞の物語である。親鸞聖人はヨキヒト法然からどのようなオホセを聞き取ったのか、その法然はヨキヒト善導からどのようなオホセを受け取ったのか。善導—法然—親鸞—唯円と受け継がれてきた仏道の核心を物語るのである。その意味では用語や表現は法然の用語に近い、しかもそれが親鸞の己証を通して新しい表現を勝ち取っているのである。

おそらく唯円は、親鸞が先師から受け止めた仏道について述べる物語のなかからこの一章を先ずえらびとったのである。唯円は『教行信証』についての教義を知らなかったのではない、先師口伝の真信をたずねてゆくにあたって、親鸞が「ヨキヒトノオホセ」としての仏道をあらわす物語を、多くのなかから選び出して、ここにおいたのである。

「云々」とあるように、この物語はもっと長かったかもしれないが、耳の底に留めるときそこには一つの作業がなされる。その作業の意味については曾我量深が美しい譬喩であらわしている。

「ちょうどわたくしはこんなふうを考えている。たとえば富士山なら富士山、高山には、もとのほうには大森林がある。けれども、あるところまで登ると樹木がなくなり、灌木しかない。それより上にいくと、木もなくなりなにもない。そこには岩だけがある。そこには土もない。そうでありましょう。何万年、何十万年のひさしいあいだ、風雨にさらされ、けずられてしまった。風で吹かれるものは吹かれ、雨で流されるものは流されて岩だけが残る。この残った岩は、何千年、何万年も変わらない。たとえてみれば、このようなものである。」(『聴記』頁)

『歎異抄』の用語が法然の用語の影響下にあるという意味では、『唯信鈔』、『御消息』にあわせて『西方指南抄』の用語例を参考にする必要があろう。

## (2) 第一章の構想

・妙音院『聞記』

第一段 弥陀ノ誓願不思議ニ

第二段 弥陀ノ本願ニハ

第三段 シカレハ

私は、了祥の「弘願信心章」という名称によって三段に分けたい。了祥は、それぞれの段に「願」「信」という語があるから。第一段から二・三段が展開してくるように思う。

第一段には念仏往生の願について理解が示され、第二段はそのなかの「信じて」が、第三段は「摂取不捨の利益にあづかる」ことの主体的受け止めが示される。

・ 香月院深励『講林記』

第一段	「弥陀の誓願」	勸信
第二段	「弥陀の本願」	成上起下
第三段	「そのゆえは」	誠疑

・ 妙音院了祥『聞記』

第一段	「弥陀の誓願」	述信心摂取（信心によるすくい） 初、述他力信相 二、述行具信心 三、正述摂取益
第二段	「弥陀の本願」	述信心本願（信心の仏道の根拠としての本願の精神） 初、述入信要不 二、引機信文証
第三段	「しかれば」	対異義固執（善悪への固執から解放する信） 初、挙本願警覚 二、正解善悪執

・ 曾我量深『歎異抄聴記』

第一段	「弥陀の誓願」	念持の法を標す
第二段	「弥陀の本願」	信心為本を標す
第三段	「そのゆえは」	悪人正機の信相を顕す
第四段	「しかれば本願」	現生不退を結す

(3) 第一章の検討

一、なぜこの文が第一章として引用されるのか。

一、『歎異抄』における第一章の位置

本文第十八章における第一としての位置。師訓における第一章の位置。

本文第十章との関係。

本文第十一章との呼応。

#### IV 第一章第一段の検討

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせ<sup>て</sup>、  
往生をとぐるなりと信じて<sup>て</sup>、  
念仏まふさんとおもひたつところのおこる<sup>とき</sup>、  
すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふ<sup>なり</sup>。

##### 一、「弥陀の」「誓願」「不思議」の意義。

「弥陀」について。弥陀は阿弥陀（梵語、アミターユス（無量寿）、アミターバ（無量光）の訳）の略。〈無量寿経〉であきらかにしようとする如来をあらわす名称。方便として説かれた化仏としては西方浄土の仏として（狭い意味の弥陀）、真仏としては不可思議光如来と表現される（広い意味の弥陀）。私たちは「従如来生」のはたらきを阿弥陀と表現する伝統に立つのである。

「誓願」とは誓われた願いという意味。弥陀の願が、単なる願望ではなく、それを実現する、血を通わせる、生きたものとするという切ない意（こころ）が感じ取ることができる。四十八願文のそれぞれの末尾に置かれた「正覚を取らじ」という無縁の大悲の心が誓いであり、「タスケントオホシメシタチケル本願」の「おぼしめしたちける」が誓いの意欲をあらわしている。ちなみに「本願」は因本・根本の願の意味。

「不思議」は、心で思いはかることも語で言い表すこともできないこと。『大無量寿経』『阿弥陀経』には「不可思議」とあり、とくに親鸞の「不思議」の用法は『浄土論註』の解釈に基づく。この「不思議」に『歎異抄』の特徴がある。「弥陀にたすけられ」でもなく「弥陀の誓願にたすけられ」でもなく「弥陀の、誓願、不思議にたすけられ」と表現する、この「不思議」という一語がおかれたところに親鸞の独自の受け止めがある。（第十章や第十一章を参考に。またこの「不〔可〕思議」が親鸞の思想の特徴であることに注目して『歎異抄』を読もうとしたのが寺川俊昭の『歎異抄の解明』である。

この法然には「如来のはからいであって凡夫がはからうことではない」という趣旨の言葉はある。

安良岡は「「助けられ参らせて」は、お助けをこうむって。「られ」は受身、「参らす」は、謙譲の意を表す。従って、この語句は「助けられて」という受身の意味でもなく、「お助け申し上げて」という、相手に対してへりくだって言う謙譲の意味でもない。」（安良岡『全講読』四八頁）

##### 一、「たすけられまいらせて」の「たすけ」とは何か。またこの文はどこに続くのか。

「タスケ」は、「《タは手、スケは助力する意》」（岩波古語辞典）であり、

それに対して、スクヒは「①くぼみのあるもので物をしゃくってとる。②陥った危難からたすける。」（岩波古語辞典）の意である。

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせ」することは「攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり」とどのような関係にあるのか。

親鸞の用例 「弥陀の御ちかひをときてよろずの衆生をたすけすくはむとおぼしめすとするべし」（『尊号真像銘文』広本）、

蓮如の用例 「一心一向に、仏たすけたまえともうさん衆生をば、たとい罪業は深重なりとも、かならず弥陀如来はすくいましますべし。これすなわち第十八の念仏往生の誓願のころなり。」（第五帖 [第一通] 末代無智）

曾我量深は、「回向というは、弥陀如来の、衆生を御たすけをいうなり」（『蓮如上人御一代記聞書』聖典八六二）の文を引いて「仏教のおたすけは、回向である」「おまかせする」と押さえている。そのときすくいは攝取であろう。

たすけ……回向

すくふ……攝取

### 一、「往生ヲハトクルナリ」

「往生」とは、阿弥陀仏の浄土に往き生まれることである。サンスクリットの名詞は「生」と同じであったとして区別が必要ないという見解も示されているが、経典の翻訳者、すくなくとも曇鸞は「生」と「往生」を区別して使用した可能性がある。

私は、往生が浄土に往き生まれることであるとすれば、その浄土をどのように考えるかが往生の理解をも決定すると思う。浄土は、穢土の外にある世界か、浄土は穢土を包む世界か。

また「往生」を「とぐるなり」と、「トグル」という「果遂」の意が付せられているのは、そこに生涯をつくすという意味が含まれてくるのではないか。命終ということが問題になるのは、そこに退転することがあったのであり、退転せずに素懐を遂げるということが課題となるからではないか。（『御消息』などを参照。）

また「往生するなり」と「往生をば遂ぐるなり」とは、厳密には区別することが必要かもしれない。

### 一、「信じて」とは何を信じるのか。

「『弥陀の誓願不思議のお助けをこうむって往生をとげるのだ』と信じるようになって」の意か。

「弥陀のの誓願不思議のお助けをこうむって、『往生をとげるのだ』と信じるようになって、」の意か。

### 一、「念仏まふさんとおもひたつところのおこるとき」

この「念仏まふさんとおもひたつところのおこる」に「信じて」の具体性がある。信は何かの対象への信仰ではなくして、信において私のなかに念仏せんと思ひ立つところ、真の心が発起するのである。念仏もうさんとおもいたつところがおこってくる、

そこに信が信として成就する。

そして「念仏もうさんとおもいたつところ」に摂取不捨の利益にあづかるという人生の意味が成り立つ。

「念仏まふさん」とは、『観無量寿経』の伝統における念仏である。その念仏は口称念仏であり、その伝統のなかから生れた言葉。法然上人の言葉にもとづく、例えば「一向心念仏申、無疑往生思、即三心具足也、」（醍醐本、法然上人伝全集、七八三頁）など。その念仏は聖道の念仏、人間の努力や能力や意欲に基づく念仏と峻別されなくてはならない。「もろこし、我がちょうに、もろもろの智者達のさたし申さるる観念の念にも非ず、又、学文して念の心を悟りて申す念仏にも非ず。ただ極楽往生のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑なく往生するぞと思とりて申す外には、別の子さい候わず。」（『一枚起請文』、『聖典』九六二頁）

ただ親鸞の解釈としては「名号を称すること下至十声聞などに及ぶまで」（聖典二二二頁）と聞として成り立つ称名、また帰命を「本願招喚の勅命」と受けとめることなどから、次の「まふさんとおもひ たつところのおこるとき」という表現が生れる。

#### 一、「おもひたつ」

「まふさんとおもひたつところ」と「たすけんとおぼしめしたちける本願」（後述）との呼応関係。本願は「たすけんとおぼしめしたちける」ところの清浄意欲であるがゆえに、「まふさんとおもひたつところ」は、つまりその本願の意欲にめざめることの外にはない。

#### 一、「ココロノオコルトキスナハチ」

この「ココロ（心）」は前の「信じて」と響きあって信心という語を形成する。弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて…おこるとき」までは「如来よりたまわりたる信心」を語るものであろう。

「ときすなわち」は、「時、即ち」の意。「そのときただちに、即坐に、すぐに」の意味。「時熟」ということを参照に。

安田理深「時熟」（『親鸞教学』第九号、一九六六年、『歎異抄』特集号を参照。『安田理深選集』第一巻所収）

#### 一、「摂取不捨の利益」

「摂取不捨」は『観無量寿経』の真身観に出る表現であり、源空・親鸞の他力の浄土教においてすくいを表現する重要な概念。とくに親鸞は「摂取不捨」を真実のすくいを表現する経文として重視した。

『浄土和讃』弥陀経意・左訓「せふはものゝにくるをおわえとるなり」（『定本』Ⅱ・五一頁）また、

「「摂護不捨」ともうすは、「摂」は、おさめるといふ、「護」は、ところをへだてず、ときをわかず、ひとをきらわず、信心ある人をば、ひまなくまもりたまうとな

り。まもるといふは、異学異見のともがらにやぶられず、別解別行のものにさえられず、天魔波旬におかされず、悪鬼悪神なやますことなしとなり。「不捨」といふは、信心のひとを、智慧光仏の御ころにおさめまもりて、心光のうちに、ときとしてすてたまわずと、しらしめんともうす御のりなり。」(『一念多念文意』聖典五三八頁)第七章との関連。

一、「あづけしめたまふなり」

「預(あづ)く」は、他動詞で、加わらせる、参加させる。「しめはまふ」は、使役の助動詞が尊敬の意に転じ、おなじく尊敬の助動詞「たまふ」と結びついて最高の尊敬をあらわし、文末の「なり」は断定・確説の意を表す助動詞で、のである、のだ、の意。(安良岡四九頁)「物や人の管理を一時他の人にゆだねる」こと。(岩波古語辞典)また参与させる、参加させる意とされる。

仏の功德と私たちの利益との関係を厳密にあらわしている。

一、「弥陀にすくわれて往生すると信じて念仏するとき摂取不捨される」という文章との違い。